

常 照

佛教大学図書館報

54
2006

目次

・館長3年―卓上日誌から―	1
・満足度80%の蔵書づくりをめざして	3
・吉林省檔案館所蔵「旧満洲国公文書」調査報告	5
・平成17年度図書館関連委員会委員名簿	8
・平成16年度諸統計	9
・新収資料紹介『花洛細見圖』	(1)



● 輪 蔵

 輪蔵とは転輪蔵ともいい、仏教經典である一切經（大藏經）を納める回転式の書架。
 当館一階アトリウムにある輪蔵は平成9年4月に開館した現在の新図書館の建設一周年記念として通学・通信課程の同窓会、保護者会、通信教育の学友会等関係諸団体の寄付金により、浄土宗総本山知恩院経蔵内の輪蔵を二分の一に縮小複製したものである。
 真理探究、学問研究、知のシンボルとして本学の学問の中心たる場所、図書館に設置されている。

館長3年―卓上日誌から―



池見澄隆

早いもので館長就任以来、丸3年になろうとしている。そのうち3年目は副学長との兼担となった。そのため負担の過重を感じることも一再ならずあったが、反面、図書館を広い視野のなかで捉えることができたのは、思わざる収穫であったと考えている。

以下に、館長室机上の手控えを繰りながら、図書館実績のいくつかを摘記し、今後の運営方針策定の材料としたい。

● 情報サービス ●

- ・ OPACやデータベースの使用法講習を定期的に開催。
- ・ 貴重書について、その閲覧申請様式の改善、取扱い基準を作成し、運用することにより、今後の保存対策も確立させる。また、取扱いの心得を作成し、利用上の教育を始める。
- ・ 掲載・出陳等特殊利用の取り扱い基準を作成し、運用を始める。

● 収書および情報管理 ●

- ・ 収書基準の適用の徹底。
- ・ 寄贈・購入ともに受入を慎重に吟味。
- ・ 大型（高額）図書の購入手続き・基準を設定し、効率性と透明性のアップを図る。
- ・ 書庫収容量、利用頻度、予算額等勘案した上での資料形態の選択（例えば電子ジャーナルの導入、電子資料への切替）。
- ・ 大学全体の学部構成に対応した蔵書の構築。
- ・ 処理能力（件数、スピード、とくに書誌の品質）の向上。
- ・ 積年の課題であった中国語資料の整理が順調に進行。

● 施設および設備 ●

- ・ 図書館構造上の問題を指摘し、今後のセキュリティ対策（人身保護、資料保存）のひとつとして「入退館システム」の導入を当局に要望。
- ・ 書庫収容量の限界を予測し、今後の対策として地下書庫の建設を当局に要望。
- ・ 利用者の動線、サービスの動線、書架排列、資料排架等の見直し。
- ・ サービスカウンターを1階に集中。
- ・ 図書館コンピュータシステムの更新。

● 財 務 ●

- ・ 外部資金調達のため、資料・設備・事業への直接的な補助金申請。

● 国立情報学研究所(NII)関連 ●

- ・ 国立情報学研究所(NII)の大学等研究機関対象の遡及入力支援事業に応募し、2年連続採択される。
- ・ 国立情報学研究所ILL文献複写等料金相殺サービスへの加入・活用。
- ・ NACSIS-CAT総合目録データベースへの参加協力。

● 委員会制度の活性 ●

- ・ 図書館委員会、収書委員会の活動が図書館運営の方向舵となっており、選書委員の活躍が蔵書構築に直結している。

以上は文字どおりの手控えの写しであるが、これらの成果は上記委員諸氏および課長、首席専門員をはじめとする全館員の功績である。館長として満腔の謝意を表したい。

(図書館長・いけみ ちょうりゅう)

満足度80%の蔵書づくりをめざして

竹 村 心

I. はじめに

図書館利用者アンケートによれば、資料費が全国平均よりも下回っているにもかかわらず、本学図書館の蔵書の満足度は60%であった。これを満足率80%にするにはどうすればよいのだろうか？

II. 利用者満足度60%の蔵書

昨年9月に実施した図書館利用者アンケートによれば、本の「品揃え」については満足度60%、雑誌の「品揃え」については57%であることが判明した。

この数字は、わが国の大学図書館としては比較的高い数字である。

学生一人当たりの資料費が全国平均(26,418円)よりも下回っている(25,900円)にもかかわらず、60%の満足度を維持しているのにはいくつか理由がある。

III. 満足度60%の収書活動

1. 収書基準に基づく収書・選書

佛教大学図書館では、アメリカ図書館協会が策定したコンスペクタス方式によって、平成14年3月、「研究テーマ／NDC分類別収書基準」を作成し、この「基準」に基づいて収書・選書をおこなっている。このことが選書の高い質と系統的でバランスのよい収書を保証している。

社会学部公共政策学科の新設や保健医療技術学部の創設にともなって、機敏に収書基準の見直しを行なった。

時代の変化と学問の進展を踏まえ、平成18

年度には全面的な見直しを進める予定である。

2. 効率的収書・選書システム

(1) 図書館収書委員会と学部選書委員

佛教大学図書館では、平成15年度、図書館委員会の下に図書館収書委員会を設け、平成16年度には、図書館収書委員会の下に学科毎に学部選書委員を選び、図書館職員も含めて、年間10回の選書日を設定して選書を行なってきた。

(2) 資料室と図書館の違いを意識した同時選書

平成17年度からは学部資料室と図書館との違いを意識した、学部資料室の選書と図書館の選書を同時に行なうように改善して、無駄な複本を極力少なくした。

(3) 選びたくなるような見計い書架づくり

また、選書委員が選びたくなるような見計い図書の搬入をすすめるために、選書委員と見計い取次業者との意見交換会を持ち、見計い図書の搬入の改善をはかった。

(4) オンラインジャーナルの導入

さらに、図書館での利用実態を調査し、利用の少ない雑誌の購入を停止にして、新たな雑誌の購入をおこなった。

また、平成16年度からは佛教大学の学部構成を考えて、アグリゲーターによるオンライン電子ジャーナル(EBSCOhost)の提供サービスを実施した。これによって、フルテキストの外国雑誌2060タイトル(その内査読誌1500タイトル)の論文を学内のどこからでも24時間利用することができるようになった。

フルテキストを収録しているペーパー雑誌については購入を停止し、その節約経費を使って、出版社が提供するオンラインジャーナ

ル（SAGE、OXFORD）提供サービスを実現した。

(5)見直した資料費配分

佛教大学図書館では平成16年度より以下のような3つの運営方針を定めた。すなわち、

- ①学部教育との連携をより強化し、教学・進路と関連した図書館活動を実施する。
- ②学生にとって学習と情報収集のために行かずにいられなくなるような雰囲気と活気に満ちた学習図書館を実現すること。
- ③研究者にとって、体系的な蔵書構築と豊富な研究資料を整備し、情報社会を享受した研究図書館を構築・運営する。

この3つの運営方針を実現するために、新たに「学生用図書」、「特別収集：研究基礎資料」、「特別収集：近世資料」、「特別収集：浄土宗資料」の資料費区分を設けて、フレキシブルに特色ある蔵書構築を行なえるようにした。

Ⅳ. 満足度80%の蔵書構築をめざして

それでは大学図書館の蔵書に対する利用者の満足度を80%にするにはどうすればよいのだろうか？

今日の大学財政をめぐる状況は、佛教大学も同様に18歳人口の減少や経済のグローバル化によって厳しさを増している。

資料費を大幅に増やすことは極めて難しい。

こうした状況の下にあって、収書・選書活動をいかに改善するかが問われている。

(1)「研究テーマ／N D C 分類別収書基準」の全面的見直しと学部収書方針づくり

それにはまず、「研究テーマ／N D C 分類基準」を全面的に見直して、佛教大学の教育・研究の現状にふさわしく、的確な深度と広がり収書に反映することが求められている。

また、学部の収書方針を作って、学部資料

室と図書館の蔵書づくりに役立てたい。

(2)選びたくなるような見計い図書の棚作り

フレッシュな選書を行なうには、現物を手にとって本を選ぶことが肝要である。そうした意味からも見計い図書の棚作りは大切である。選びたくなるような棚作りをめざして平成18年度も選書委員と見計い取扱業者との意見交換の場を引き続き設けたい。

(3)選書への選書委員の出席率の向上

魅力ある見計らい図書の棚ができれば、現物を見ながらの本選びは実に楽しいものである。「研究テーマ／N D C 分類別収書基準」に基づいて的確な本選びを選書委員の方々にしていただくならば、満足度80%の蔵書づくりに一歩近づくだらう。

(4)学生用図書と選書ツアー

選書委員は学生に読ませたい本を選択しているが、学生が読みたい本と必ずしも同じではない。このズレを埋める試みとして、学生を大型書店に引率し、一人5冊を選ぶ「選書ツアー」を9月におこなった。

この取り組みは本好きの学生が本離れの学生も巻き込んで、本を読む活動を生み出したことも含めて、ダイナミックな選書の一つの流れをつくっていることに注目したい。

(5)現物貸借サービスの開始

佛教大学の収書基準に含まれない本や絶版本は所蔵している他大学図書館から借り受けなければ、利用できない。こうした要望に応じて、平成18年度から佛教大学図書館は現物貸借サービスを開始する。こうしたサービスも満足度80%に近づく有力な方法の一つであることにかわりない。

以上の5項目を完全に実施するならば、満足度80%の蔵書づくりに近づけるだろう。

(図書館専門員・たけむら まこと)

吉林省档案館所蔵

「旧満洲国公文書」調査報告

飯野 勝則

2005年11月末から12月初にかけ、外部からの招請を受け、旧満洲国政府の文書調査に関する、国際学術交流の一環として、中国・吉林省档案館を訪れる機会を得た。かねてから旧満洲国を始め、戦前の台湾・樺太等の文書類について、所在調査を続けてきたが、これほどの機会に恵まれたのは始めてである。何しろ档案館の所在地は長春市。かつては、旧満洲国の首都として新京の名で呼ばれていた街である。吉林省档案館についてのうわさは何度も耳にしてきたものの、正直、どのような文書が眠っているのか想像もつかない。「档案」とは、日本語で「文書」乃至は「書類」をさす言葉であるが、档案館は、その名が示すように、いわゆる行政文書を主体に幅広い種類の文書を保存する責務を負っている。つまり、日本で言うところの「公文書館」あるいは、「アーカイブ」と呼ばれている組織の中国版にあたる存在といえる。中国において档案館は、国家档案局という中央機構の下に全て組織化されており、その数は大規模なものから小規模なものまで、その数は実に3816ヶ所にのぼるが、その位置づけ及び利用に際しては「中華人民共和国档案法」及び「中華人民共和国档案法实施办法」という法令で、全国統一の基準が設定されている。研究者等の利用については、その範囲内で許可されているとはいうものの、「愛国主義教育基地」に指定されるような施設である。外国

人には敷居が高く、また法令における利用規定も厳格であり、なかなか閲覧ができるものではない。早速、千載一遇の機会を物にすべく、吉林行きを受け入れることにした。

吉林省档案館は、長春の中心、中国共産党及び政府の施設が集中する一角に位置していた。この地区の象徴とも言うべき建物が旧関東軍司令部である。旧関東軍司令部といえば、旧満洲国の歴史を知る人間であれば知らぬ人はいないほどの巨大な存在であるが、大阪城を模したその威容を目にすると、歴史ある風格に圧迫感さえ覚える。聞けば現在は中国共産党吉林省委員会が使用しているとのこと。党の幹部が執務をする環境であるが故か、建物の撮影は決して許されない。門前には往時と変わらぬ憲兵の姿。今も昔もここは政治の中心である。実のところ、档案館も同一の敷地に位置するため、建物に向かうには、憲兵のチェックを経なければならない。外国人であればなおさら警戒は厳しい。職員の帯同がなければ、まず憲兵による検査を通過することはできないであろう。この関門を通過しても、档案館の入り口には別の警備員が常駐しており、再度出入りを監視する。外国人に限らず、中国の一般の利用者も気軽に入れる環境ではなさそうである。

1945年8月9日午前3時ごろ。満洲国の首都たる新京の街は突然の轟音に包まれた。それは日ソ中立条約を一方的に破棄し、対日参

戦に踏み切ったソ連軍用機による、明確な敵意の表示に他ならなかった。ほぼ時を同じくし、極東ソ連軍の第一・第二・第三方面軍が、いわゆるソ満国境を越え、満洲国への大規模な侵攻を開始する。この報を受け、当時新京にあった各種政府機関は、日本の敗戦を覚悟し、様々な極秘文書の処分を決断。各所で一斉に焼却が開始された。関東軍司令部の裏手の焼却炉でも、文書の燃える煙が昼夜を分かたず上がっていたという。

ソ連軍が新京を接収したのは、参戦して僅か10日後の8月19日のことである。満洲国成立以来、13年5ヶ月—その間に首都で生み出された数多くの文書が、この数日間に灰燼に帰した一方で、時間的な制約から、焼却を免れた文書もまた多かった。せめてその存在が知られないようにとの思いを以て、地中深くに埋められた文書もあったが、その中には後に中国側の手で発見されたものもあったと聞く。その後、数々の局面を経て、これらの文書のうちの多くが、最後には吉林省档案馆に収容されることとなった。このような遍歴に思いをはせるだけでも、この地に眠る文書が背負っている歴史の重圧を感じざるをえない。その文書にもうすぐ出会うことができると考えると、必然的に心が高ぶる。

档案馆の閲覧室は、一般的な図書館とそれほどの変わりはなかった。古ぼけた机と椅子、そして職員のいるカウンター…いささか古びてはいるが、必要最低限の機能は有している。文字資料である文書の保存・整理という性質上、档案馆には図書館と類似する側面がある一方、収蔵資料の多くが原資料であることから、保存方法などに一定の異なる側面がある。

吉林省档案馆においても、多くの資料は通し番号が打たれ、製本ではないものの、ファイル形式により一括して綴じた形での閲覧ができるようになっている。ファイルとして綴じられていないものは、作成時期・接収場所等で分けられた茶封筒にまとめて保存されている。このあたりは図書館と大きく違う点である。当然、これらには明確なタイトルが存在するわけではないし、また吉林省档案馆の場合、本学のOPACや日本の国立公文書館のデータベースのように、閲覧したい書物や文書をタイトル等で検索できるシステムも存在しない。見たい文書を探すためには、毎日が「勘」との勝負であり、ひたすら文書をめくる根気が要求される。興味深い資料を発見した際の喜びはひとしおだが、日本でも閲覧できる資料しか出てこなかった際の落胆も人一倍である。

文書をめくる指先に鈍い痛みを感じ、あわてて準備していた指サックをはめる。燻蒸の際に、よほど強烈な薬剤を使っているのだろう。明らかに紙上に残留しているようだ。かつては青酸ガスによる燻蒸が主流であったようだが、作業が危険とのことで、現在は別の薬品を利用しているとも聞く。むしろ青酸ガスであった方が、資料に残留しないはずなので閲覧する方としては安全であるのだが…今の状況は何となく落ち着かない。

とはいえ档案馆で得られた成果は予想以上であった。かつてうわさでは聞いたことがあったものの、実際に目にすることが可能だとは到底思えなかった文書。それらが中国側との一週間にわたる数々の交渉や、あきれるほどの紆余曲折の時間を経て、ようやく目の前

に積み重なっていく。文書自体の遍歴が生み出す「物言わぬ迫力」とでも言おうか、日本ではまず目にすることができないであろう、原資料が持つ生々しい力に圧倒されることこの上ない。

そのような中、決定的とも言える文書がついに姿を現した。

一 満洲中央銀行文書

特段正式な名称があるわけではないので、便宜上このように呼ぶことをお許し願いたい。旧満洲国の中央銀行で作成された文書群である。日本で言うなら、日本銀行で作成された文書とお考えいただければさしつかえない。しかし銀行が果たす役割については、満洲中央銀行と日本銀行とでは趣を異にしており、この点が文書の性質にも影響を与えている。日本銀行は個人への貸付業務など、一般の銀行業務を全く行っていないが、満洲中央銀行はこういった業務も日常的にこなしていた。このため国家の中央銀行でありながら、一般の銀行業務をこなす必要があり、旧満洲国の隅々まで「支行」「分行」と呼ばれる細かな支店網を有していたことがわかっている。これらの出先機関から、新京にある「総行」に上げられた文書の中には、国家行政の予算支出から、農民への貸付まで、政治や農民生活、治安維持など、当時の政治・社会・世相を伝えるありとあらゆる細目が含まれている。満洲国の建国初期、国家予算は組まれたものの決算が発表されないという時期が数年にわたって続いたことがあるが、その時期の決算の一端を示す資料や建国公債の信用を担保するアヘンの専売、塩の専売関係の資料も数多い。そして特務機関による満洲事変の事後処理等

に関する資料まで…いずれも日本では存在すら知られていない内容ばかりである。

目を通すたび、ため息をつきたい気分にも駆られる。よくもこれだけの文書が残されていたものだと、正直思う。そのほとんどが損傷を受けた形跡も見られず、完全な形で残されている。終戦時期の動乱を考えれば、まさに奇跡的としか言いようがない。総数50000枚のうち、今回閲覧許可が出たのは僅かに2000枚程度に過ぎなかったが、それでも十分すぎるほどの衝撃を受けた。

帰国の途、空港への車上から窓の外を見た。日のいまだ昇りきらぬ中、どこまでも凍てついた純白の大地が広がっていた。気温は零下20℃を割っている。暖房は入っているはずなのだが、それほど効いていない。身を切るような寒さとはこのような状態をいうのであろう。日本の穏やかな気候が心底恋しくなる。

昔、この地には確かに今と異なる国があって、人々の生活があって、そして多くの文書が生まれていた。そのことを再確認する。このような文書を保存していくことは、大部分のものが「唯一」の存在である希少性、そして散逸や劣化の危険性を考えると、図書よりも数倍難しいといっても過言ではないだろう。しかしこれらの資料が、全て図書や書物にまとめられる以前の資料であり、歴史資料としての価値が極めて高いことを考えれば、今後も完全かつ安全な形で保存が行われていくように、心から願いたい。

そう。少なくとも、個人的には燻蒸の方法や使用薬剤を最新のものに変更する余地があると思うのだが…。

(図書館専門員・いいの かつのり)

○平成17年度図書館委員会委員

笹田 教彰（文学部総務担当主任）	委員長
谷川 至孝（教育学部総務担当主任）	副委員長
大東 貢生（社会学部総務担当主任）	副委員長
藤松 素子（社会福祉学部総務担当主任）	副委員長
藤本 淨彦（副学長）	
原田 敬一（文学部長）	
西岡 正子（教育学部長）	
広瀬 卓爾（社会学部長）	
岡村 正幸（社会福祉学部長）	
小林 隆弘（財務部長）	
池見 澄隆（図書館長）	
瀬澤 且博（図書課長）	
古川 千佳（図書館専門員）	
竹村 心（図書館専門員）	
飯野 勝則（図書館専門員）	

○平成17年度収書委員会委員

大東 貢生（社会学部総務担当主任）	委員長
笹田 教彰（文学部総務担当主任）	副委員長
谷川 至孝（教育学部総務担当主任）	副委員長
藤松 素子（社会福祉学部総務担当主任）	副委員長
池見 澄隆（図書館長）	
瀬澤 且博（図書課長）	
古川 千佳（図書館専門員）	
竹村 心（図書館専門員）	
飯野 勝則（図書館専門員）	

○平成17年度学部選出選書委員会委員

（文学部）
安達 俊英、今堀 太逸、小野田俊藏、笹田 教彰、長友千代治、
西川 利文、門田 誠一、持留 浩二、若杉 邦子

（教育学部）
黒川 嘉子、谷川 至孝、中村 義行、西村 隆司、松瀬 喜治、
山田 泰嗣

（社会学部）
大東 貢生、富田 英典、藤田 和夫、星 明、の場 信樹

（社会福祉学部）
池本美和子、神谷 栄司、末崎 栄司、中田智恵海、丹羽 國子、
藤松 素子、朴 光駿

平成16年度 諸統計

蔵書数

	内国書	外国書	合 計
図書	641,892冊	164,486冊	806,378冊
雑誌	5,767種	1,968種	7,735種

注：図書は、大学全体の所蔵数である。

資料区分別受入冊数

資 料 区 分		和書	中国書	洋書	その他	計
図 書(単行本)		13,092	3,945	1,342	0	18,379
逐 次 刊 行 物		1,549	600	696	0	2,845
マイクロ資料・その他	マイクロ資料	277	0	34	0	311
	点 字 資 料	1	0	0	0	1
	地 図 資 料	20	20	2	0	42
	楽 譜 資 料	1	0	0	0	1
	録 音 資 料	48	3	2	0	53
	映 像 資 料	447	5	41	0	493
	静 止 画 像	40	0	0	0	40
	機械可読ファイル	64	16	2	0	82
	博 物 資 料	1	0	0	0	1
	そ の 他	0	0	0	3	3
小 計		899	44	81	3	1,027
合 計		15,540	4,589	2,119	3	22,251

注：図書(単行本)は、大学資産として受け入れられた全冊数であり、通常整理と簡易整理(学術研究助成分など)に分けられる。逐次刊行物は、製本雑誌の登録数である。

主題別整理冊数(単行本)

主 題 別	和書	中国書	洋書	計
0 類 総 記	870	199	20	1,089
1 類 哲 学	1,273	593	215	2,081
(14) 心 理 学	(150)	(0)	(13)	(163)
(18) 仏 教	(493)	(115)	(90)	(698)
2 類 歴 史	1,263	975	70	2,308
(21) 日 本 史	(824)	(8)	(12)	(844)
(22) 東 洋 史	(202)	(755)	(18)	(975)
3 類 社会科学	4,164	231	379	4,774
(36) 社 会 学	(828)	(17)	(173)	(1,018)
(369) 社会福祉	(360)	(0)	(57)	(417)
(37) 教 育	(687)	(59)	(19)	(765)
4 類 自然科学	291	9	37	337
(49) 医 学	(206)	(4)	(24)	(234)
5 類 技 術	258	15	11	284
6 類 産 業	377	18	1	396
7 類 芸 術	209	118	14	341
8 類 言 語	268	121	77	466
(81) 日 本 語	(66)	(0)	(1)	(67)
(82) 中 国 語	(140)	(118)	(31)	(289)
(83) 英 語	(10)	(0)	(9)	(19)
9 類 文 学	815	589	147	1,551
(91) 日本文学	(552)	(0)	(0)	552
(92) 中国文学	(95)	(582)	(4)	(68)
(93) 英米文学	(42)	(1)	(128)	(171)
特 別 資 料	1,513	561	710	2,874
合 計	11,301	3,429	1,681	16,411

注：平成16年度に大学で受入登録された単行書の通常整理(データ入力済)分である。() 内は内数である。

主題別貸出冊数

利用者別 主題区分	通 学				通 信				教 職 員		そ の 他		合 計	
	学部		大学院		学部		大学院							
	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書
0 類 総 記	144	0	6	0	41	0	2	0	11	0	6	0	210	0
1 類 哲 学	7,110	7	2,483	99	2,716	4	541	12	834	49	863	56	14,547	227
2 類 歴 史	4,690	1	1,258	8	1,018	0	237	8	400	3	293	12	7,896	32
3 類 社会科学	14,586	9	1,705	7	6,849	2	626	1	632	122	328	19	24,726	160
4 類 自然科学	1,283	0	228	0	532	1	24	0	79	1	62	1	2,208	3
5 類 技 術	893	0	74	0	84	0	6	0	18	0	55	0	1,130	0
6 類 産 業	574	0	90	0	89	0	9	0	33	0	3	0	798	0
7 類 芸 術	1,665	0	111	0	344	0	20	0	64	0	71	2	2,275	2
8 類 言 語	3,962	1	577	23	1,244	9	132	10	307	10	250	9	6,472	62
9 類 文 学	3,910	14	583	9	1,516	8	327	40	212	18	256	9	6,804	98
分 類 な し	1	0	15	0	0	0	0	0	19	0	9	1	44	1
計	38,818	32	7,130	146	14,433	24	1,924	71	2,609	203	2,196	109	67,110	585
中国書	23		77		66		7		47		35		255	
国 書	2		15		0		1		12		2		32	
佛 書	0		12		0		1		4		0		17	
宗 書	17		15		0		0		9		0		41	
文 庫	10		69		0		0		52		35		166	
そ の 他	1		2		5		10		6		5		29	
合 計	38,903		7,466		14,528		2,014		2,942		2,382		68,235	

注：利用者別の「その他」には、研究生・研究員・卒業生・事務利用等を含む。

『花洛細見圖』

古川 千佳

近世京都の地誌、名所記は本書『花洛細見圖』の序文にも紹介されている「山城名所記」「京わらんべ」「京はぶたへ」「雍州府志」をはじめ、のちに叢書を編むことができるほどあまた著され、愛されてきました。「京都叢書」の名では京都叢書刊行会、光彩社が、「新修京都叢書」の名では光彩社、臨川書店が、「新撰京都叢書」の名では臨川書店がそれぞれ刊行しており、近代現代までみれば京都関係の著作を集めたものは枚挙にいとまがありません。このうち「新修京都叢書」に名を連ねる近世京都本の一部をみてみましょう。

『京童』（きょうわらべ）、『京童跡追』（きょうわらべあとおい）、『京雀』（きょうすずめ）、『京雀跡追』（きょうすずめあとおい）、『京羽二重』（きょうふたえ）、『京羽二重織留』（きょうふたえおりどめ）、『新益京羽二重織留大全』（しんえききょうふたえおりどめたいぜん）、『京独案内手引集』（きょうひとりあんないてびきしゅう）、『都すずめ案内者』（みやこすずめあんないしや）、『京町鑑』（きょうまちかがみ）、『名所都鳥』（めいしよみやこどり）、『京内まいり』（きょううちまいり）、『都名所車』（みやこめいしよぐるま）、『都花月名所』（みやこかげつめいしよ）、『洛陽十二社靈驗記』（らくようじゅうにしやれいげんき）、『都名所図会』（みやこめいしよずえ）、『拾遺都名所図会』（しゅういみやこめいしよずえ）、『寶永花洛細見圖』（ほうえいからくさいけんず）、『花洛絵馬評判』（からくえまひょうばん）、『都林泉名勝図会』（みやこりんせんめいしよずえ）、『雍州府志』

（ようしゅうふし）、『京師巡覧集』（けいしじゅんらんしゅう）、『洛陽名所集』（らくようめいしよしゅう）、『出来齋京土産』（できさいきょうみやげ）、『菟芸泥赴』（つぎねふ）、『京城勝覧』（けいじょうしゅうらん）、『山城名勝志』（やましろめいしよし）、『山州名跡志』（さんしゅうめいせきし）、『京都坊目誌』（きょうとぼうもくし）、『扶桑京華志』（ふそうけいかし）、『山城名跡巡行志』（やましろめいせきじゅんこうし）、『山城名所寺社物語』（やましろめいしよじしやものがたり）、と、こんなに沢山の本が出版されています。

さて、『花洛細見圖』もこれら古今刊行されつづけている京都本のひとつです。元禄十七（一七〇四）年の序をもち、表紙題簽には「寶永」と冠する地誌ですから、江戸期の京都本の中では中期にかけてのものといえましょう。元禄時代の京都は町人文化が花開いた時期といわれます。商業出版も盛んになり、書肆が多く立ち並び、本学に近い西陣は機織の音もさぞかしにぎやかだったと思います。「花洛」とは花の都京都のことであり、京都の社寺仏閣や花の名所とともにおもな年中行事があわせて紹介されています。

一冊目壹之巻には年中行事が集中して収められ、目録（目次）には「正月體」「弥生節句」「端午」「七夕」「重陽」「住吉踊」「大神樂」「傀儡師」「御火焼」と九つの見出しがたてられています。

「正月體」の本文中標題は「新春」となっていて、床の間の三宝や軒端の注連縄飾りなど正月のしつらいのなかで鳥追や千寿萬歳が

描かれています。

「弥生節句」の本文中標題は「上巳」、中国由来の行事で五節句のひとつ、弥生三月上旬巳の日の節句で、後に「三」を重ねて三月三日の雛祭りとなりました。「重三」ともいいます。

「端午」は旧暦でいう五月（午の月）最初（端）の午の日の節句を意味していました。午の日はかならずしも「五日」とはかぎりませんが、後に「五」を重ねた日になりました。中国・屈原の故事に由来する行事で、軒端の蓬や菖蒲とともに龍ののぼりや武者人形が飾られた様子がかえまます。「重五」ともいいます。

「七夕」は中国由来の乞巧奠と日本の祖霊信仰、棚機津女（たなばたつめ）伝説が習合した行事で、床の間に短冊をつけた笹飾りがつらえられた部屋で梶の葉に習字をする子や屋外では川で文机や硯を洗う子の姿も見え、文芸技芸の上達祈願が表れています。

「重陽」は陰陽思想にいう陽の月の最大値「九」に同じ数の日を重ねた九月九日のことで、菊の露を身につけ、菊酒を酌交して邪気を払い長寿を願うという菊の節句です。「重九」ともいいます。

「住吉踊」は堺・住吉大社の田植神事として今もつづいているものです。ここに描かれているのは同様に御幣を冠した長柄の大傘を中心に早乙女のでたちに紅絹の覆いをつけた菅笠姿で踊る、都の大道での様子であり、住吉神社以外でもあちこちで踊られていたようです。季節は「五六月（もちろん旧暦ですが）」を限る」とあります。

「大神楽」では曲太鼓、獅子舞を伴った岩戸神楽の様子が描かれています。

「傀儡師」（くぐつし）には摂州西宮を発祥の地とし、木偶（でく）回しとも呼ばれる傀儡師（人形遣い）が肩から掛けた胸もとの箱か

ら小さな人形を出して庭先で門付けする様子が描かれています。これらは「えびすかき」、「えびすまわし」ともいわれ、『常照』52号で紹介した『十二月あそび』では「恵比寿かき」と呼ばれていました。人形浄瑠璃芝居の源流といわれています。

目録見出し「御火焼」の本文中標題は「火焼」となっています。千社万神の神事として街中を行く神輿とともに家庭でも行われていた火焼の様子が描かれています。

二冊目貳之巻の目録には「禁裏」（御所）の日の御門・公家門・南門・唐門及び「花洛」の名にふさわしく花の名所、祇園・高台寺・知恩院・御室・右近馬場・東寺の「花見之體」が見出しに立てられています。

「禁裏」では日の御門・南門・唐門・公家門に清涼殿・常御殿・公卿殿上人や後宮の様子が垣間見えます。

「花見之體」には祇園感神院の鳥居あたりと知恩院、高臺寺と東寺、御室仁和寺と北野神社右近の馬場が見開きそれぞれ上下二段に描かれています。

三冊目参之巻から十五冊目十五之巻にはそれぞれ神社仏閣を中心に見出しが立てられ、行事などの特記事項は並び書き、付けたり書きがなされています。

本学ゆかりの浄土宗三本山である百萬遍（知恩寺）、黒谷（金戒光明寺）は四之巻に、知恩院は五之巻に収められています。また、本学にほど近い今宮社、大徳寺、千本閻魔堂は十四之巻に、平野神社や金閣寺、北野神社は十五之巻に収められています。

紙幅に限りがあるため十五之巻まですべてを本号に載せることが出来ませんが、いずれ時をわけてご紹介する予定です。

（図書館首席専門員・ふるかわ ちか）

本書の内には巻頭題がなく、標題は序及び目録（目次）の題によるものである。刷題簽に雕まれた外題は「寶永花洛細見圖」、このうち最初の二字「寶永」は角書となっている。全十五冊のうち第二、五、八、十、十二、十四冊の題簽には、「花」ではなく「華」の字を用いて「寶永華洛細見圖」としている。

体裁は大本折本仕立て、一見無地に見える紺表紙であるが、繊細な秋草（女郎花であろうか）の文様が描かれている。

本紙は楮紙を用い、見開きに絵図及び詞書を彫る。加茂の祭礼や競馬、祇園祭、相撲の図、壬生寺狂言、唐人来朝図、曲馬乗、四条芝居體、武家礼儀、山伏峰入りなど行列や見せ場の多い図は見開き一丁分を上下二段に分かつ。本書は京都寺町の洛陽繪本所・金屋平右衛門の板になる刊本であるが、藏者によるものであるう後人の手で一部彩色されている。かえつては、九之卷「壬生寺」の前「六宮權現」のあと「嶋原體」三丁分を欠いている。

「新修京都叢書」によれば八之卷「知積院」の二葉目として収められる檀林の図は本書においては五之卷「禪林寺」の二葉目として収められている。また、同叢書では貳之卷「花見之體」の最後に収められている「御室仁和寺」の一葉は本書では十五之卷の最後に付されている。解題では「卷二に入るべき」と断定されているが、目録見出しにある「花見之體」の「御室仁和寺」は北野社「右近馬場」と同葉の上下に彫られており、仁和寺のみの独立した一葉は「花見之體」に並ぶ社寺のレイアウトとは体裁を異にし、むしろ三之卷以降の社寺の体と同じくしている。しかし、目録の見出しには貳之卷「花見之體」以外に御室あるいは仁和寺の名立てはない。同叢書の

いうとおりはじめから「花見之體」に付されていたものか、目録名立てのほかに追刻されたものか、どちらが本来のかたちであったのかは丁付がないので不明であり、他本との比較調査が必要である。裏表紙にはいつのころの旧藏者名であろうか「八手幡氏」の墨書が見える。

標 題…花洛細見圖
 刷題簽…寶永花洛細見圖、または 永華洛細見圖
 序 題…花洛細見圖
 目録題…花洛細見圖
 刊 年…元禄一七（一七〇四）年序刊
 板 元…金屋平右衛門（京都）
 形 態…折本
 員 数…一五卷一五帖
 図 数…見開き一四四丁分
 題 簽…白無地紙中央双辺
 表 紙…紺色地に秋草模様
 本 紙…楮紙に絵図および詞書
 大きさ…縦約二六・三×横一八・五 cm
 詞 書…漢字交じり平仮名文（振仮名、濁点多）

影印図版に詞書の翻刻釈文を付すが、漢字に振られた仮名は多数にのぼるため紙幅の関係で割愛せざるを得なかった。



「花洛細見圖」



〔首巻より巻五までの題簽〕

花洛細見圖序

予後王城ハ桓武天皇より己来累世の皇居ナリ
 萬歲の地ナリト云々長久の守護として靈社冥仏
 玉沢あり一四地舊蹟とすかや久遠あり板行の書
 物山城名所記と始京わらんべ京はぶたえ雍州志などさ
 まくに多くありといへども今我家に商所の繪本に便す
 花の南北を見めぐり神社仏閣故事來歴祭礼法事
 の年中行事雪月花の故蹟名所等まで悉あらため堂舎
 方角とそれの容を寫し全部十五卷の繪本とす是偏に
 一人の手に出るといへども普く諸國の翫となり且は洛陽獨家
 内の便のみにあらず又は畫工の助にもなるべければまた
 梓にちりばめて永き桜の春にむかふと云り

元禄十七甲申歲正月吉日

洛陽繪本所

寺町通二条丁二町目

金屋平右衛門校

花洛細見圖序

それ王城は桓武天皇より己来累世の皇居千秋
 萬歳の地なれば文武長久の守護として靈社冥仏の
 示現ありし旧地舊蹟もすくなからす此故に板行の書
 物山城名所記を始京わらんべ京はぶたえ雍州志などさ
 まくに多くありといへども今我家に商所の繪本に便す
 べき書なきを残おほく日夜に洛陽の東西に歩み朝暮中
 花の南北を見めぐり神社仏閣故事來歴祭礼法事
 の年中行事雪月花の故蹟名所等まで悉あらため堂舎
 方角それの容を寫し全部十五卷の繪本とす是偏に
 一人の手に出るといへども普く諸國の翫となり且は洛陽獨家
 内の便のみにあらず又は畫工の助にもなるべければまた
 梓にちりばめて永き桜の春にむかふと云り

元禄十七甲申歲正月吉日

洛陽繪本所

寺町通二条丁二町目

金屋平右衛門校

花洛細見圖目錄

神社佛閣年中行支
名所回跡諸色雜書

壹之卷

正月體

弥生節句

端午

七夕

重陽

住吉踊

大神樂

傀儡師

御火焼

貳之卷

禁裏

日之御門
南門

公家門
唐門

花見之體

祇園
高臺寺

知恩院
右近馬場
東寺

參之卷

上加茂社

并

競馬

下加茂社

并

葵祭

四之卷

松ヶ崎

千葉寺

百萬遍

吉田社

真如堂

黒谷

銀閣寺

送り火

鹿ヶ谷

五之卷

永観堂

南禅寺

栗田口祭

庚申

知恩院

長樂寺

丸山

東本願寺御塚

双林寺

花洛細見圖目錄

神社佛閣年中行支
名所回跡諸色雜書

壹之卷

正月體

弥生節句

端午

七夕

重陽

住吉踊

大神樂

傀儡師

御火焼

貳之卷

禁裏

日之御門
南門

公家門
唐門

花見之體

祇園

高臺寺

知恩院
右近馬場
東寺

參之卷

上加茂社

并

競馬

下加茂社

并

葵祭

四之卷

松ヶ崎

千葉寺

百萬遍

吉田社

真如堂

黒谷

銀閣寺

送り火

鹿ヶ谷

五之卷

永観堂

南禅寺

栗田口祭

庚申

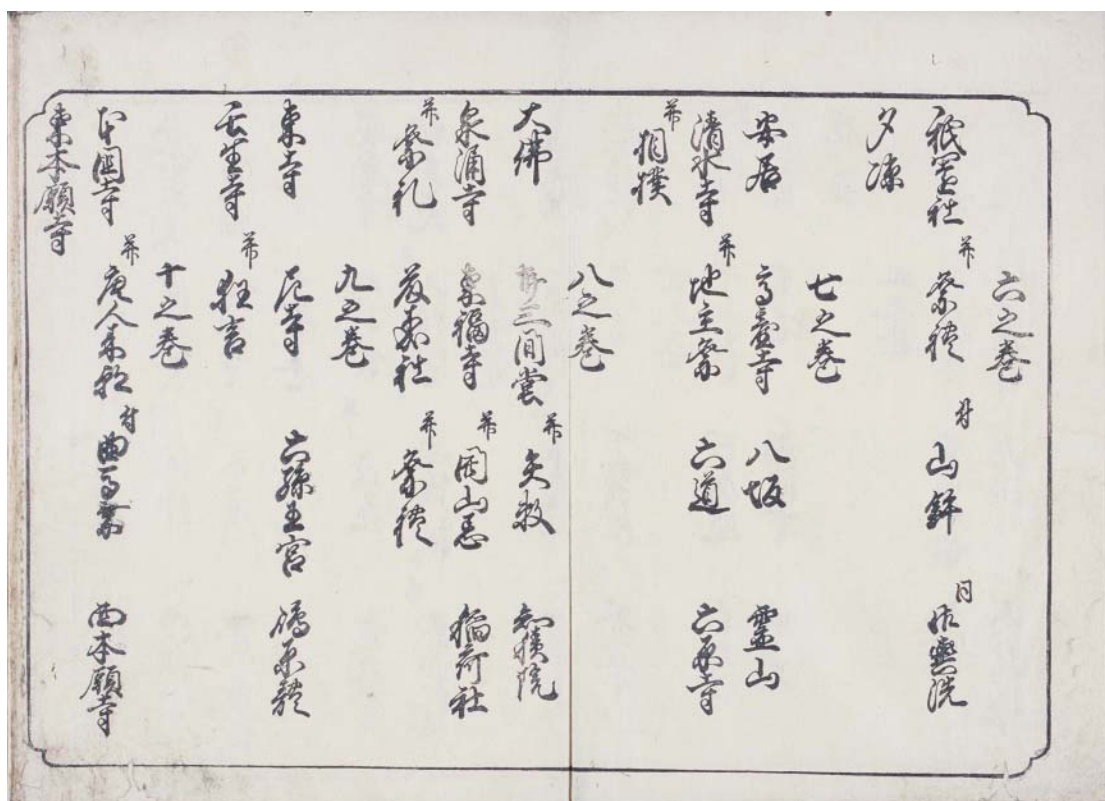
知恩院

長樂寺

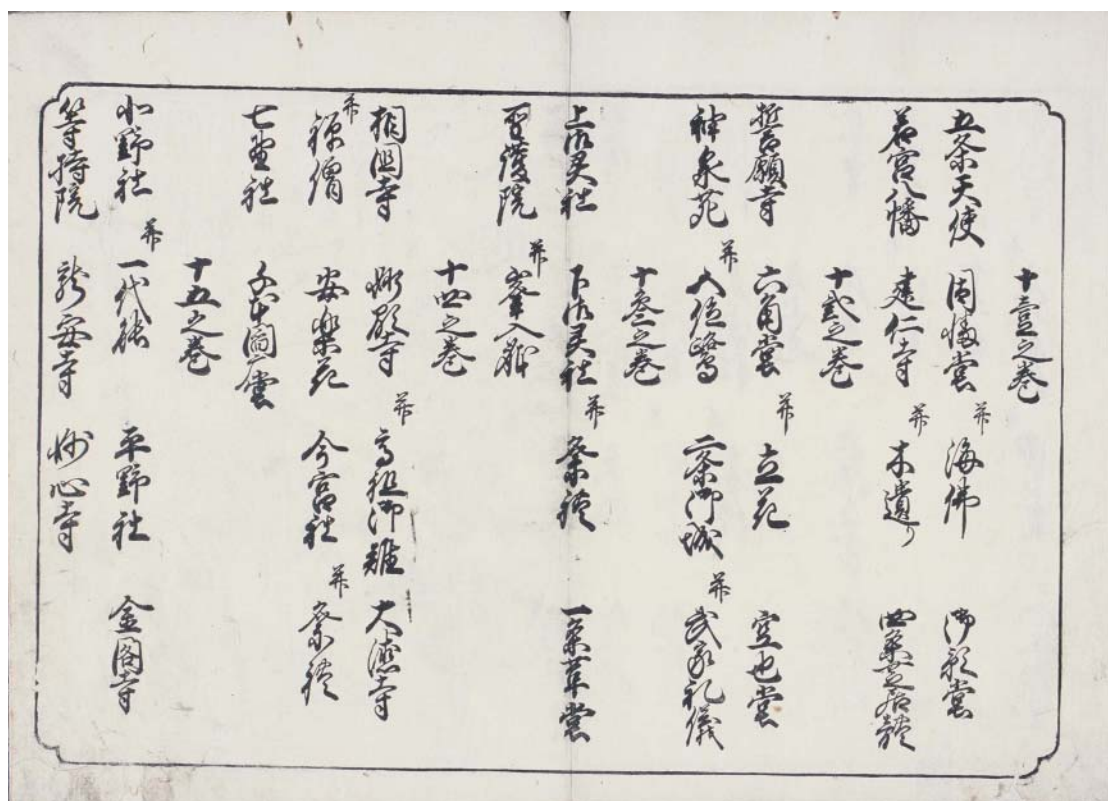
丸山

東本願寺御塚

双林寺



東本願寺	本國寺 并 唐人來朝 付 曲馬乘	東寺	東寺	大佛	八之卷	并相撲	清水寺 并 地主祭	安居	七之卷	夕涼	祇園社 并 祭禮	六之卷
西本願寺	西本願寺	尼寺	六孫王宮	卅三間堂 并 矢数	知積院	并相撲	六道	高臺寺	八坂	山鉾	同御輿洗	
		狂言	嶋原體	泉涌寺 并 開山忌	稻荷社		六原寺	靈山				
		十之卷		并祭禮								
				九之卷								



十壹之卷

五条天使

因幡堂

海佛

御影堂

若宮八幡

建仁寺

木遣り

四条芝居體

十貳之卷

誓願寺

六角堂

立花

空也堂

神泉苑

五位鷺

二条御城

武家礼儀

十參之卷

上御灵社

下御灵社

祭禮

一条草堂

聖護院

峯入躰

十四之卷

相國寺

妙顯寺

高祖御難

大德寺

并 禪僧

安樂花

今宮社

并 祭禮

七聖社

千本閭廣堂

十五之卷

北野社

并 一代能

平野社

金閣寺

等持院

龍安寺

妙心寺

十壹之卷

五条天使

因幡堂

并

御影堂

若宮八幡

建仁寺

并

四条芝居體

十貳之卷

誓願寺

六角堂

并

空也堂

神泉苑

五位鷺

并

武家礼儀

十參之卷

上御灵社

下御灵社

并

一条草堂

聖護院

并 峯入躰

十四之卷

相國寺

妙顯寺

并

大德寺

并 禪僧

安樂花

并

祭禮

七聖社

千本閭廣堂

十五之卷

北野社

并 一代能

平野社

金閣寺

等持院

龍安寺

妙心寺

【壹之巻】

新春

長々敷君か御國の時津風枝をならさず
おどろかぬ鳥追や屠蘇のさかづきかさぬる年は千寿万歳
はやせやと打つゝみのをとまでもみなよろこびの和哥ならめ



上巳

陽春の徳そなはりて弥生の空は青楊を
いとなまめかしき小女まで千筋の髪にかけまくも
神のおきてをさからはぬしるし
桃色の小袖は永日のかげにうつろひひるなの契りあさか
らぬ御代とかや



端午

風雲を和す龍ののぼりはいとけなき子の勢に似て
なをす系ながきをたのしめり



七夕

よはひもなかきうしの角文字よりまなぶ

(糸ひもせず)

京のわらはへ硯をあらいつく糸をそぎて梶の葉の
あを空や織女が恋の三十一字をあどなき筆にちらするなりし



重陽

九月九日の節句すべて都鄙遠境の世人菊をあつめて酒をもとめ一期の榮は一盃の酒とたのしむも陶淵明が古にかはらざりき



住吉踊

堺住吉の祭御田植の神曳とて社中の若僧いづれも早乙女の出立をまなび祝詞の哥をうたふて踊る毎年七十余度の祭の其甚つ也それを真似て京人の勧進する下僧等女帯に赤まへたれすけかさ紅の絹おふひうちわ拍子をととり都の町ををとりありきてくわんじんを乞その比はいつも夏五六月を限る



大神樂

神代のむかし天岩戸のまへの御神樂に八百万神たち
すゝしめの神うたに岩戸をすこしひらき面しろやとの神の御声
末の代のまなびは曲太鼓を打獅子舞をし都わらんべをいさましむるに
面白やとは今もいゑり
実神國のしるしなれはいづれかこれをあふがさらん



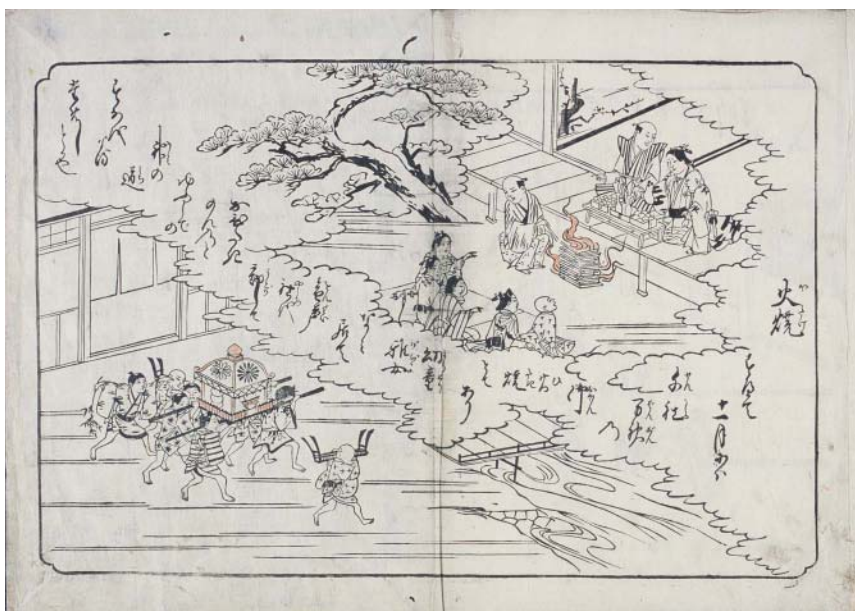
傀儡師

いつも春の比は都の町をはいくはいし方二尺の箱を負ひ中にちいさき人
形を入れて家々に来り
あやなき一ふしにてこれをまはしいとなみとす
出所は摂州西の宮より来るとそ世にあやつりと名付て人形をつかふもこ
れよりはじまれりといふ



火焼

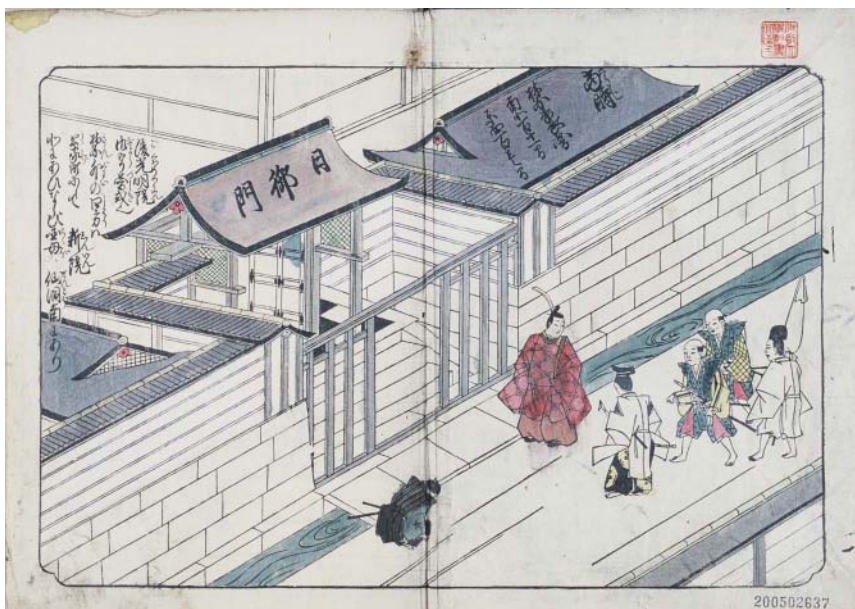
すへて十一月には千社万神の御火焼とてあり幼童雅女なみ居て音声社を動しておひたきのんのとゆふしでの神の道すなをなるとめしとかや



【貳之卷】

〔禁裏 日御門〕

(當時 禁裏圖 南北百十一間 東西百壹間)
後光明院御宇圖式也
禁外の四方は公家町にして新院北にあひならび國母仙洞南にあり



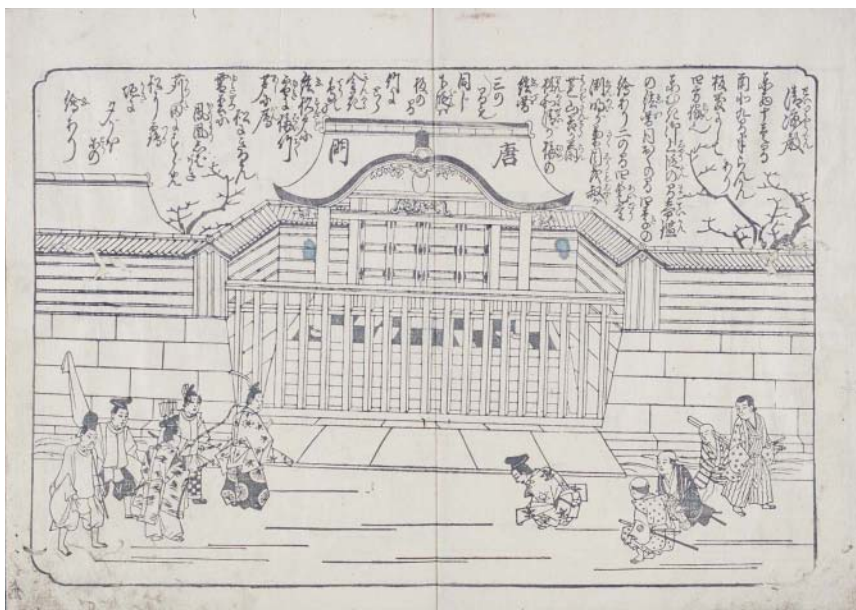
〔禁裏 南御門〕

紫宸殿東西十一間南北八間半板敷にして四方板縁也 南殿と号す
元日即位等の儀式に此殿を用 賢聖の障子絹を以て張 御縁の杉戸に繪有
殿上の間東西拾間南北五間南むき也 御階をのぼりて小板敷なり職原抄
侍醫参るは此所なり 繪は獅子にぼたん 菟田に鶴等也 昇殿人の外地下の
人此所にのぼる事なし



清涼殿

東西十壹間南北九間半らんかんあり板敷にして四方縁也
東むき御上段の間帝鑑の繪圖同おくの間四季の繪あり二の間四愛堂
瀨明が菊 周茂叔が蓮 山谷が蘭 林和清が梅の繪圖 三の間も同じ
下段は板の間 竹にとら 金花鳥の繪 杉戸に雪に梅竹 芦に雁
松にきりん 雪霰に鳳凰しばがき 菟田にすゞめ 松に鶴 垣に夕がほ等の
繪あり



常の御殿

東西十三間半
南北十間半

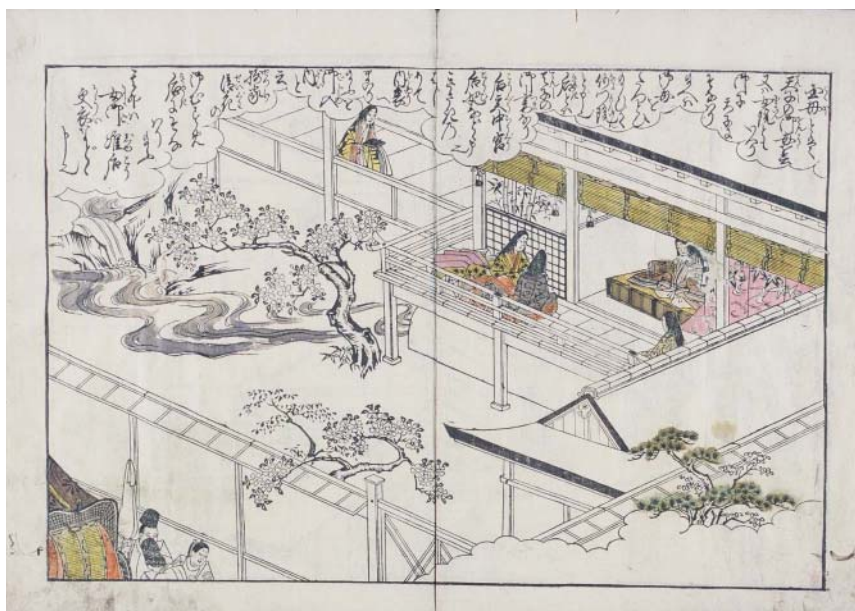
天子の常居也 夜の御殿 昼の御座みな此殿なり 御障子に絹を以て張
桐にほうわの繪有
御上段の間に竹林の七賢人 中段は四皓四老 下だんは九老なり



桓武天皇ゑんりやく十三年に長岡の京より此平安城にうつされしよりこ
のかた九百年余を経て二たび他国にうつさるゝ事なし 千穠萬々歳の地也
公卿殿上人その品位たゞしく朝政つとめ給ふ うつくしき冠の纓の左往右
往として大人の風に裾をふかせ給ふ御有さまおさまれる世のためしかく
こそあるべけれ



国母とは天子の御母を云又は女院ともいへり 御子天子にそなはり給へ
 は御母をたつとひ給て何門院と申也
 后とは天子の御妻なり后宮中宮后妃などと申也 きさきのはじめて内裏
 へまいり給ふを御入内と云 摂家清花の御むすめ后にそなはり給ふ 其外
 は女御准后更衣などと申也



『花洛細見圖』

「花見之體」

(上段) 常さへあるにぎをんの春はなをいやましのにぎはひ也

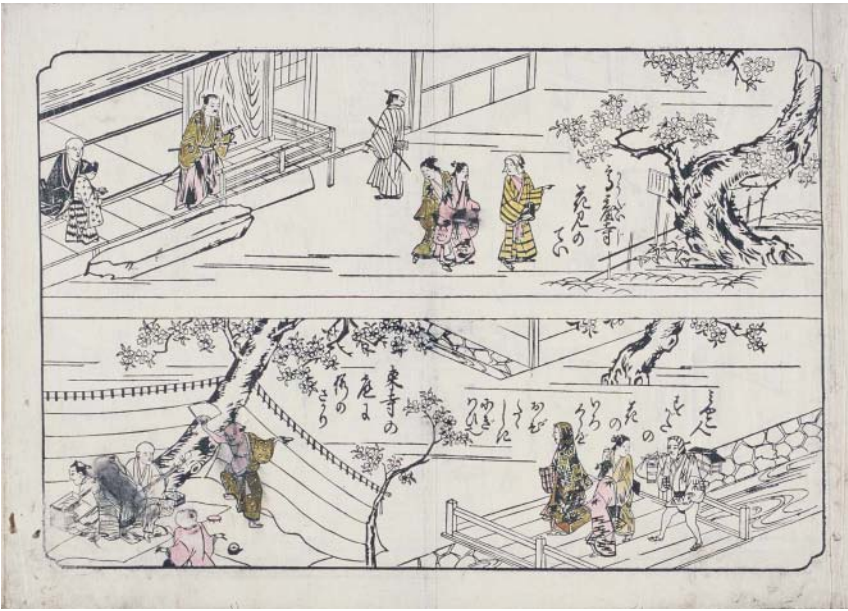
(下段) ちをんあんの詠はさら也

無情を花になぞらへてしばらくのたのしみもさとりにちかき風
 情とぞ



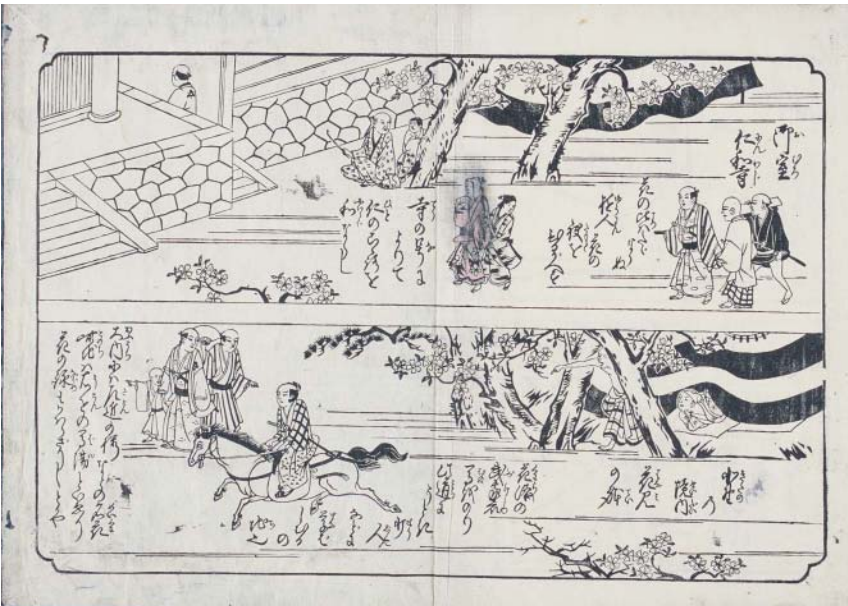
(上段) 高臺寺花見のてい

(下段) みやこ人すがたの花のいくらべおびた、しきにぎはひ也
東寺の庭に桜のさかり



(上段) 御室仁和寺 花の比はたゞならぬ遊人花の袂をひるがえす
寺の号によりて仁のこゝろを和なりし

(下段) 北野の境内花見の躰 花洛の武家衆馬をのり此道にうとき少人な
どに学ばしむるの地也 大内には左近の桜などの名花此地は右近
の馬場といゑり 花の詠もかはらざりしとや



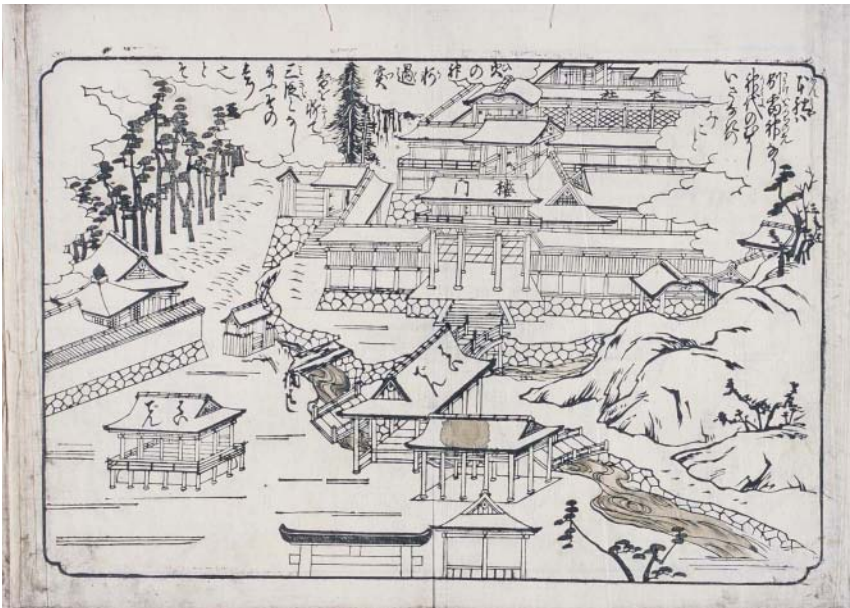
【参之卷】

上賀茂 社領二千七百石余

欽明天皇の御宇に加茂上下をまつり初め給ふ廿一社の中なり



本社は別雷神なり 神代のむかしいきなきのみこと火の神軻遇突智を斬て三段となし給ふその言つ也とぞ



(上段)

いかつちのおかみあれ山のまつりは卯月中のむまの日なり
此日はかくにんたちみなく馬にのり御さきにたち
下かものもりをいつるときとみあれ山にるとき

(下段)

五月五日けいはしやうふのき



(上段)

おんかくあり 第一にしやうのやく第二かつこ第三ふ系第四ひ
ちりき第五たいこ第六せうこ
それくのおんかくにてまひあり しゆせうの事也

(下段)

五月一日あしそろえあり おなしく五日までつかひとふ也
むまかす二十四ひき一とせの月をかたとりて 赤とくろとつか
ひてはせいたす



(上段)

御あふひかつらたかつきにもち此あいたに御さかきあおにきて
しらにきてあり 御むまのまへに目かくしあり しんめにみおや
の御かみのせたてまつり きぬかさをさしくすうち人あまた

(下段)

うこんのは、のひおりの日といふ事いせものかたりにかけるも
この日をいふなり またはうこんのは、のまてつかひといふも



(上段)

かものうち人ねきはふりたちあまた
(かとのおき) (おほこ六ほん)

(下段)

そのかみけいはのはしめはこれたかこれひと御くらひあらそひ
ありしより 此けいはのかちまけによりて御くらゐをさためた
まいしより事おこりしとぞ



(上段) たいかうの人御あまおほひのすけかさをになふ
(御たて) (御ゆみ)

(下段) 五月一日をあらてつかひといひ五日をまてつかひといひならは
したり されはとんあほうしのうたに



(上段) (御しやく) (御たち) 上かもみおやの御まつりは中のとりの
日なり 此日御へいしう かくにん くらつかい こん系し
かものてんそう ちよくしなとあり 御くるまあり御とねりせ
んのふまいるいつる そのほかあまた

(下段) らちのうちにくらふるこまのかちまけはのれるおのこのむちの
うちからともよめり まことにけふあることなり



下賀茂

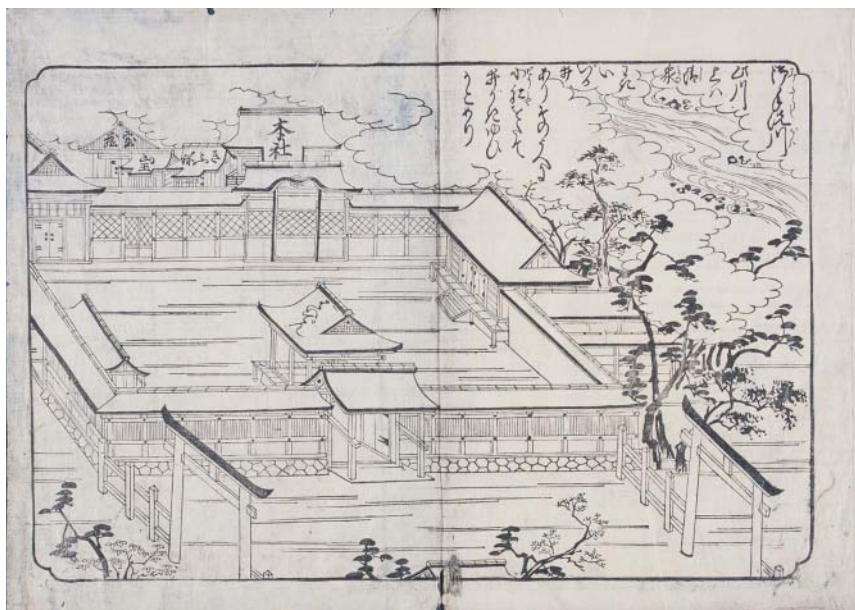
社領五百四十石余

健角命のむすめ玉より姫なりこれを糺の明神といふ



御手洗川

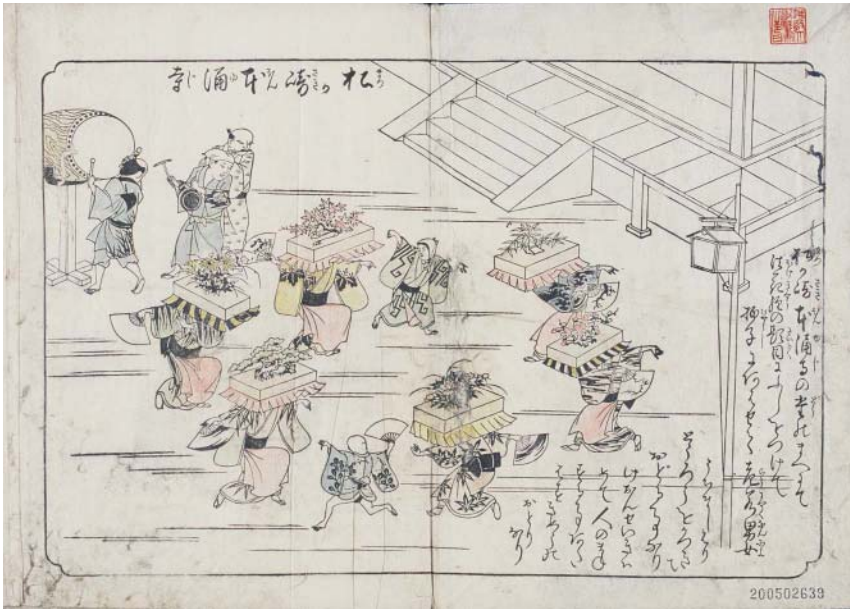
此川上は清泉わきいづる井ありそのうへに小社をたて井がきゆひかこめり



【四之巻】

松か崎本涌寺

松か崎本涌寺の堂のまへにて法花経の題目にふしをつけて拍子にあはせて老若男女うちまはりとうろうをかつきておどる事なり
此おんせいきはめて人のまねする事あたはすきめうのおとりなり



干菜寺六齋

六月廿五日此寺においてまいねん六さいだいこのうちぞめあり
この日は一日よるまできんがうの百しやうどもうちよりて六さいねぶつ
申事也



長徳山智恩寺

寺領三十石余 百万遍

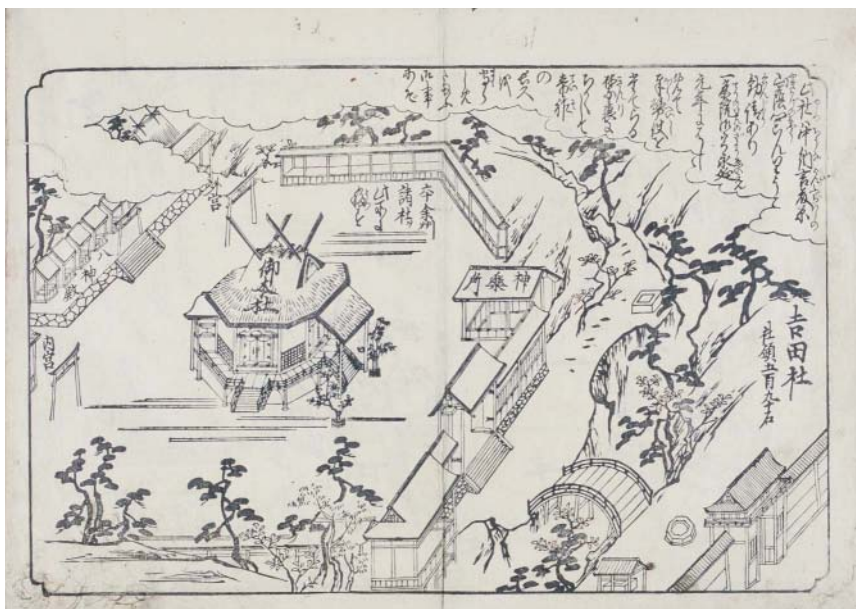
浄土鎮西四ヶの一本寺 源空上人の弟子勢観房のかいき中興浄忠上人といへる僧この寺を住持して十ねんをさづけて疫病をいやしけるもおりから大きなるじゆずをつくりしよ人これに取つき高声念仏をしかば 糸きれいのなやみをはらいけりこれより百万へんといへる名は付たりとかや



吉田社

社領五百九十石

此社は中納言藤原山蔭卿こんりう勧請あり 一条院御宇永延元年にはじめて奉幣使をたてらる 禁裏にちかくして帝祖の長久を守らしめたまふ御事にぞ (六十余州諸社ヲ此所に移す)



鈴聲山極樂寺真如堂

寺領百五石

清和天皇の御宇慈覺大師の開基也 中興かいさん戒算上人
本尊弥陀慈覺大師の作 不断念佛の道場なり



紫雲山金戒光明寺

東山新黒谷

寺領百卅石余

浄土鎮西四ヶの一本寺 圓光大師開基の灵場也
毎年正月十九日より廿五日まで元祖ゑんくはう大師の
御忌として鎮西一宗の末寺数度の僧衆大會式あり



慈照寺 寺領

三拾四石余

應永八年しやうぐん源義政公こんりう東求寺と号す此所弔
すませ給ひすぐにほだい所とせらるはじめ庭の面に閣をたてられ
銀はくにてさいしきたるゆへ俗に銀閣寺と名づく



送火

芋蘭盆會の魂祭七月十四日よりしやうりやう棚をしつらい
香花供物を備へ十六日の夕には送火とてあり
東山には大松明にて大文字を作る
松ヶ崎には法の字をとす事みなおくり火のいわれなり



萬無寺

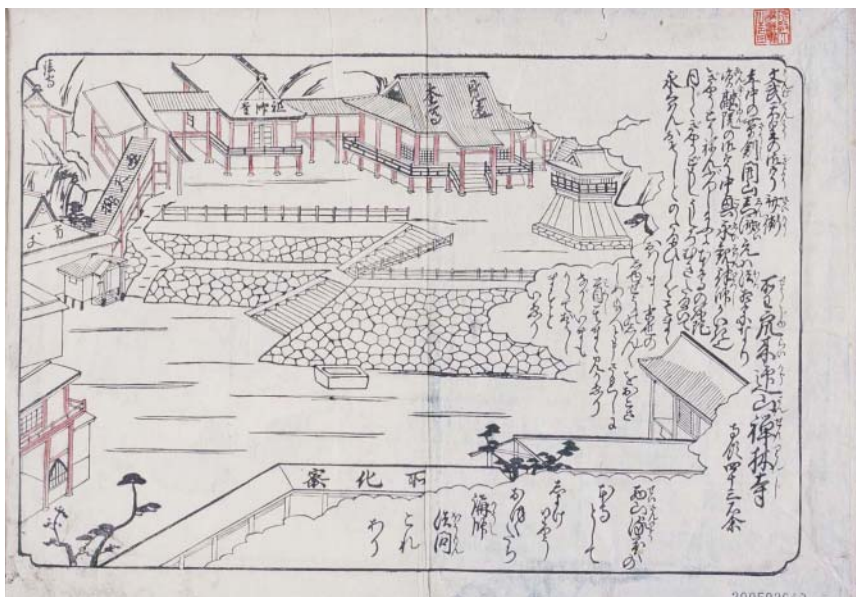
開基萬無大和尚法然院と号す
不斷称名念佛の灵場世に六字詰のねんぶつをとなへて
鹿が谷風儀といへるは此寺の事也
種木のひゞきやむ時なく佛名の声不退なればいとしゆせうにそ



【五之巻】

聖衆来迎山禪林寺 寺領四十三石余

文武天皇の御宇齋衡年中の草創開山真済（真紹の誤りか？）元は法相宗
なり 圓融院の御宇中興永觀律師かいき也 ぎやうとうねんぶつし給ふ
に本尊の弥陀同じくぎやうどうしうしろむきたまいて 永くはんおそし
とのたまひしを其まゝおはしまし末世のしゆせうのしんくをおこさし



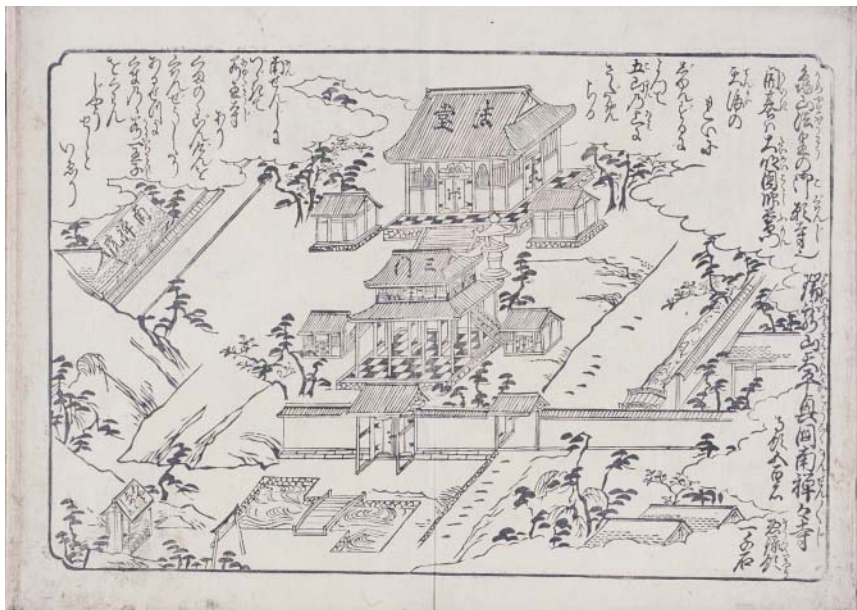
め給へと申され
しに首其まゝ見
かゑりながら
いまかくておは
しますといゑり
西山流儀の本寺
としてしよけり
やうおほくた
講師法問これあ
り

〔檀林の図〕

たんりんの事なにしてよらすその師をのふけといひ弟子をしよけといふ
しよこのしよけをあつめて一しよのきやういをさとらしむ



〔花洛細見圖〕



瑞龍山天平（太平の誤りか？）興國南禪々寺

龜山法皇の御願寺也

寺領五百石 惣祿領一千石

開基は大明國師普門天海のれいにじゆんずるによつて五山の上にさだめ
らる

南せんじにつゞきて若王寺あり くまのゝごんげんをくはんぜうしたり
あるせつにくまのゝ若一王子をくわんじやうせしといふ

粟田口祭

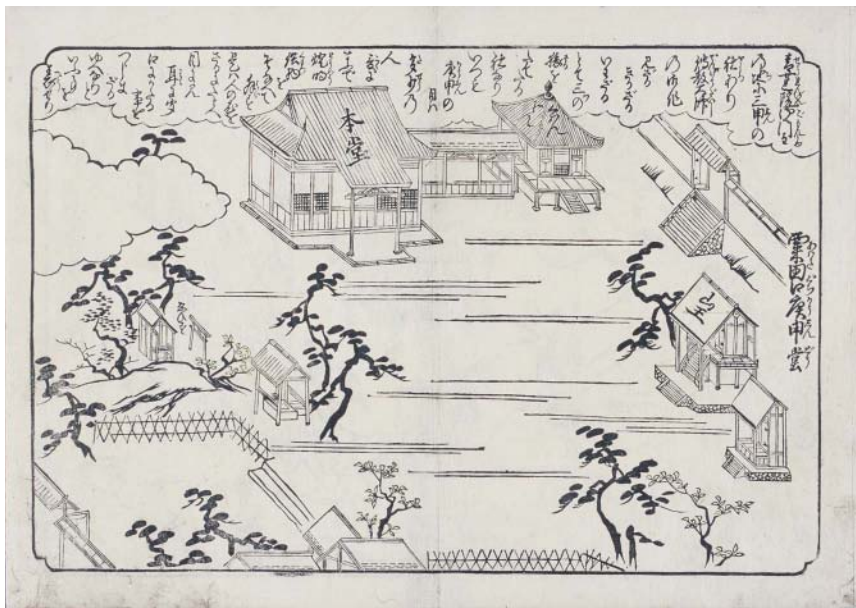
九月十五日

あはた口まつりは天王八天王子と申て祭の鉾あまた太く重くこしらへ此所の人にさゝせ
 なんせんしのまへを北へ黒谷大路をわたる此はしをわたすをけんふつの第一としらく中の貴賤あしをつまたつ事也



粟田口庚申堂

青蓮院御門主の地に三申の杜あり
 傳教大師の御作見ざるきかざるいわざるとて三ツの猿をたてたる杜なり
 いつも庚申の日は多少の人爰にまふで燈明供物をそなへて拝す
 是は人の心をさるにたとへ 目に見 耳に聞 口にかたる事をつゝしま
 ざるゆへなりといふ事を表せり



東山大谷寺智恩院

寺領六百八拾三石余

順徳院の御宇建暦元年にこんりう 開基圓光大師日本鎮西浄土惣本寺也
一心院はちをんゐんの内にあり ゑんくわう大しのすみ給ひしあととい
ふ

又吉水はゑいさんの内に同名有 この吉水は丸山のへんにありその
かみ慈鎮和尚こゝに住給ひしゆへに吉水おしやうと号すとかや



東山長樂寺

本そん十一めんくはんをん也 宇多院の御こんりう
安徳天皇の御衣幡にぬいて此寺にあり 寺領八石四斗



丸山安養寺

寺領八石三斗余

長樂寺の北にあり

時宗なれども遊行の末寺にはあらずとそ

寺中に池あり 慈鎮和尚の住たまひし吉水といふはこれ也

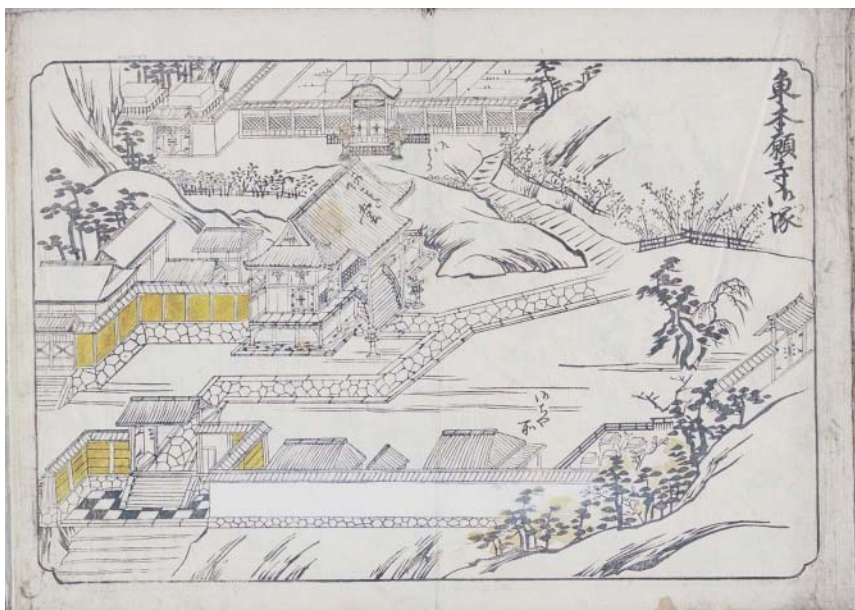
今はみなゆうらんしゆゑんの宿になりて座敷ひろくしつらい

遊人のはたご出して業とす

寺家いづれもおなしく尼と法師とふうふにて住けり



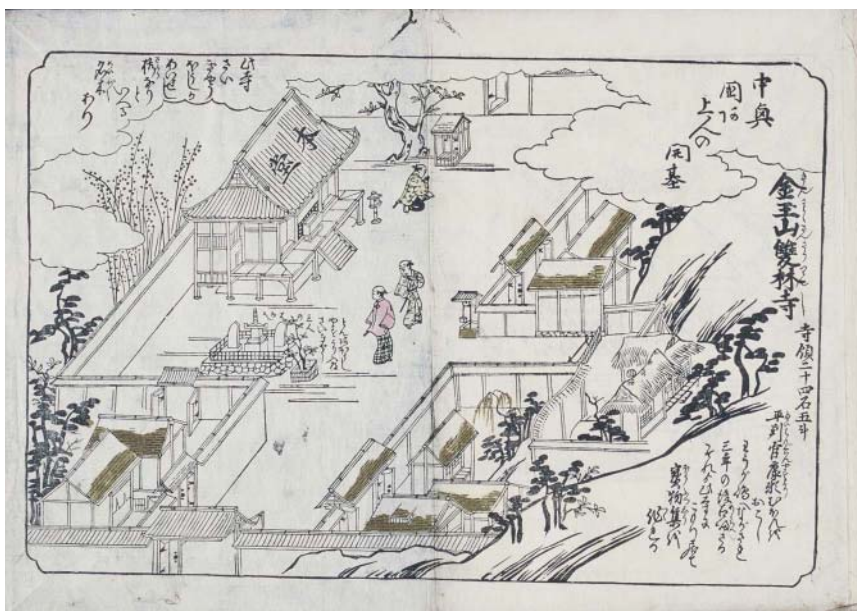
東本願寺御塚



金玉山雙林寺

寺領二十四石五斗

中興國阿上人の開基平判官康頼むほんをおこし わうが嶋へ
ながされ三年の後召歸さる
それより此寺にこもり居て寶物集を作れる
此寺さいぎやうほうしかあいせし桜なりといへる名木あり
(とんあほうしやすより入道さいぎやう三人のはか也)



【六之巻】

【祇園社】

清和天王貞観年中に山州愛宕郡八坂の郷にはじめて鎮座也 是より東丸
山長とくし さうりんし東本願寺御はか所なとへの道すじ きおんの寺
領百六石余 此西東をきおんはやしといふ 本名祇陀園なり 此うしろ
みなくきおんはやしといふ ちおんるん三条なとへぬけ道あり



JOSHO

BUKKYO UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN



佛教大学図書館

＜後記＞

◆今号編集途中に“池見教授 館長退任”のニュースが飛び込んできた。今年度は副学長職兼任でもあり、多忙によるご疲労は極に達するものであったと思われる。“わたくし”を捨てて、本学図書館のために文字通り尽力された教授に館員一同感謝上げたい。

常 照 — 佛教大学図書館報 第54号

平成18年3月1日 発行

編集・発行 佛教大学図書館

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96

TEL 075(491)2141

FAX 075(493)9042

<http://www.bukkyo-u.ac.jp/lib/>